

## 近世薩摩焼の藩外流通に関するノート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2987">http://hdl.handle.net/2297/2987</a>

# 金大考古 第53号

## 近世薩摩焼の藩外流通に関するノート

渡辺芳郎 (鹿児島大学法文学部)

### はじめに

近世薩摩焼(薩摩藩内において生産された陶磁器の総称)の流通圏は、近世初期の茶入や幕末の輸出用金欄手薩摩をのぞくと、主として薩摩領内と琉球など南西諸島であった。しかし近年、江戸遺跡や日本海側のいくつかの遺跡などで、薩摩産と考えられる土瓶などが出土してきている。しかし薩摩焼として抽出・報告された事例はけっして多くはなく(関2006, 毎田2006など参照)<sup>(1)</sup>、また土瓶については生産地側での検討も徐々に始まっているが(関2006)、今のところ十分とは言えない。一方、文献史料には、薩摩焼の藩外流通を伝えるものがいくつか確認できる。そこで本稿では、将来的な考古学資料の蓄積を期待しつつ、その準備作業として、それら文献史料を整理し、若干の検討を加えておきたい。

### 1 文献史料

①古河古松軒『西遊雑記』天明3年(1783)(宮本他編1969 pp.329-395)

「市来(湊共云也)伊集院の間に苗代(ノシロ)村といふ有り。(中略)平生の業には世に薩摩焼と云諸器の陶をして渡世とす。(他国へ出す事おびただしき事なり。)」  
※古河古松軒(1727-1807)は岡山出身の地理学者。著作に本書のほか『東遊雑記』などがある。天明3年(1783)に九州一円を踏破した際、薩摩を訪れている。

②佐藤成裕『薩州産物録』寛政4年(1792)  
(鹿児島県立図書館写本蔵, 1945年3月, 牧野富太郎

書写, 上野1982)

「土器 今種々出ス 肥前焼ト同様也 三都ノ外琉球及罵々并ニ支那ヘ入ル 其數不可勝計 硯ノ類猶多シ」

※佐藤成裕(1762-1848)は江戸の本草学者で、天明元~3年(1781-83)、藩主・島津重豪の招きにより、薩摩領内の採葉を行う。薩摩関係の著作に『薩州採葉録』『薩州産物録』『採葉録』『中陵漫録』などがある。本書では薩摩藩領内の産物を、項目ごとに、主として殖産興業的な視点から解説している。

③橘南谿『西遊記』寛政7年(1795)(橘(宗政)1974)  
「其外は下品にて質厚く、色も薄黒く、烈火にかけても破ることなし。故に下品は土瓶などに多く造り出す。これは夥敷売買して、薩、隅、日の三州は大方民間にも此土瓶を用ゆ。猶、大坂までもうり来たりて、薩摩焼と称して重宝とす。薩摩にてノシロコ(=苗代川-引用者注)焼のチョコカという。チョコカとは茶家の心にて土瓶の事なり。」

※橘南谿(1753-1805)は三重出身の医師。天明2~8年(1782-88)、医術修業のため、全国を巡歴し、その見聞を『東遊記』『西遊記』としてまとめる。薩摩へは天明2~3年(1782・83)に訪れている。

④佐藤成裕『中陵漫録』文政9年(1826)(日本随筆大成編集部編1929 pp.1-335)

「苗代川 薩州土瓶は奥羽の地方に至る。」

※著者は②と同じ。著者の見聞をまとめた随筆集。

⑤高木善助『薩陽往返記事』文政11年(1828)12月3日の記事(宮本他編1969 pp.609-820)

「里人田を耕し機を織り、又多く伝来の高麗焼をなす。国守御用の品類は白薬なり。土瓶・すり鉢・壺其外さまざまの物を多く焼て馬に背せ、日々城下に来り売す。上方にて薩摩土瓶とて黒薬の土瓶此里(=苗代川-引用者注)の産なり。」

※高木善助(1786-1854)は大坂の商人。薩摩家老・調所広郷

(1776-1848)の天保改革の際に和紙生産で大きな役割を果たす。文政11年(1828)～天保10年(1839),計6回薩摩を訪れ,そのときの見聞をまとめたものが本書。

⑥『薩藩政要録』文政11年(1828)(鹿児島県史料刊行会1960)

「他国江不出品々之事」に「茶湯道具」,「御勝手方証文を以他国出品々之事」に「焼物壺」,「他国出御利潤有之品々之事」に「茶家」とある。

※『薩藩政要録』は薩摩藩の行政文書集。原名『要用集』。

⑦佐藤信淵『薩藩経緯記』文政13年(1830)(佐藤1883)

「其他白岩多くして甕器(館野の白焼の土罐(ドビン)其名既に天下第一と称す)を製するに宜しく,紫泥粘植甚だ硬強なり以て陶器(加地木の玉流の土罐及び壺家の甕と土罐其性強きこと天下に比類なし)を夥しく焼出すべし 貴藩の甕器は世人の珍重する所なれども製造すること多からざるを以て国益を為すに足らず」

※佐藤信淵(1769-1850)は出羽出身の経済学者。著作に『経済要録』『農政本論』などがある。また各藩に財政再建策を提言し,本書は薩摩藩への建白書。

⑧「繭糸織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴」明治18年(1885)

(『薩陶製菓録』所収。鹿児島県立図書館写本蔵)

「朴正伯長男 朴正山(中略)」

一 文化九年(1812-引用者注)二月焼物師ニテ御功米被成下候 此以前ハ當村民ニ農商アリト雖モ 一般陶工ニ従事セシメント目見立申論候処 村民共其気風ニ立至リ 弟子ヲシテ稽古セシメ是ニ伝授シ 其業ヲ遂クルモノ多シ 故ニ黒焼竈ノ設置アラン事ヲ藩主ヘ立願ノ処 御 可アリ 稽古小部竈御建築被下 夫ニ付黒焼物盛ニ出来 當国内ノ日用品ニ充分セリ 将タ豊後地肥前肥後地迄モ輸出交易ヲ初メリ(下略)

※明治18年に東京で開催された繭糸織物陶漆器共進会の際に提出された陶工の履歴書。『薩陶製菓録』によれば,まず苗代川と龍門司からそれぞれ鹿児島県令・渡辺千秋宛に提出され(苗代川の提出者は鹿児島郡外四郡長・池田休兵衛),両者を整理・統合したものが農商務卿・松方正義宛に提出されたようである。上の記述は,苗代川から県令宛に提出されたものの一部。

2 若干の検討

前章で,薩摩焼の藩外流通について記した文献史料

を8例挙げた。多くが断片的であり,また⑥のような公文書による記述もあるが,旅行者による印象的記述もあり,どれだけ実態を描いているか,判断が難しいものもある<sup>(2)</sup>。しかしそれでも,これらの情報から,薩摩焼の藩外流通について,いくつかの示唆が得られる。ここではそれをまとめた。

まず多くの文献が触れているのが土瓶(茶家)である。③④⑦では苗代川の土瓶が,また⑦では「館野(堅野窯-引用者注)白焼の土罐」「加地木(龍門司窯-引用者注)の玉流の土罐」が挙げられている。さらに⑥では,「他国へ売って利潤を得る品物」のひとつに挙げられているように,薩摩藩としても重要な商品としてみなしていたことがわかる。④の「奥羽の地方に至る」の記述に信を置けば,その流通範囲は東北地方まで至っていた可能性がある。また③⑤で記されているように,薩摩藩内でも多量に流通しており,それは県内の近世遺跡において頻繁に出土していることから裏付けられる。

ところで薩摩焼における土瓶の出現年代は,現段階では明確ではないが,③で触れていることから,18世紀末にはすでに生産されていたのであろう。また文化3年(1806)の『薩藩名勝志』に描かれた苗代川の絵図に土瓶が多数描かれていることは(図1 鹿児島県立図書館編2003),当時の苗代川で土瓶が主要製品と認識されていたことの表れと推測される<sup>(3)</sup>。

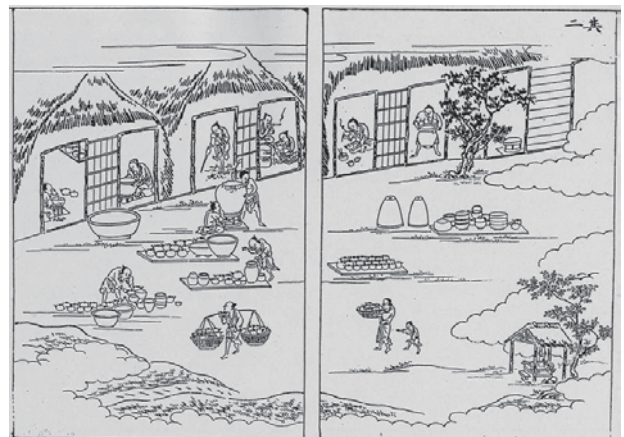


図1 『薩藩名勝志』における苗代川の製陶風景 (鹿児島県立図書館編2003より)

つぎに④の「奥羽の地方に至る」と関連すると思われる研究成果に触れたい。

薩摩藩は,北海道松前から昆布を購入し,琉球を介して中国へ輸出していたが,その際に,富山の売薬商

人「薩摩組」に、唐物薬種の供給と藩内における売薬許可の見返りに、昆布を上納させていた(高瀬 1993, 徳永 2005 など)。深井甚三は、嘉永 5・6 年(1852・53)の薩摩組の薩摩からの購入物品を整理し(表 1・2), その中に、茶道具など唐物陶磁器が含まれていることを指摘している。そして「陶磁器の中には茶道具とみられるものもあるなど、購入唐物の大事な分野に茶道具関係品がある。また、この茶器なども含む陶磁器も重要な購入品であった」としている(深井 1999 p.32)<sup>(4)</sup>。

また鹿児島出土の清朝磁器を検討した橋口亘は、天保 6 年(1835), 新潟で発覚した薩摩船抜荷事件の探索書『北越秘説』の一文(「唐瀬戸物類 沢山ニ有之」)を引きつつ、「琉球-薩摩-国内他地域」という、中国産陶磁器の流通ルートの存在を想定している(橋口 1999)。

以上より、近世後期の薩摩藩が、陶磁器を含む北陸・

東北地方との物資の流通ルートを確認していたことは間違いなかろう。その中に薩摩焼がどの程度含まれていたかが、今後、解明すべき課題である。

ところで『鹿児島県勸業年報』によれば、明治 14・21～25 年に、苗代川で焼かれた土瓶が、「肥前」「肥前島原」「肥後」「熊本」へと出荷されている(表 3)<sup>(5)</sup>。年間 9,000 個～32,300 個であるが、その金額を見ると、1 個の値段はきわめて安価であったことが知れる(出荷額/出荷量の平均: 0.017 円/個)。また日置市美山(旧苗代川)の雪山遺跡からは、明治 20～30 年代と考えられる土瓶が多数出土しており(宮田・関・三垣編 2003), 明治に入っても土瓶が苗代川の重要な製品であったことがうかがい知れる。

⑧によれば、19 世紀の初め頃より「豊後地肥前肥後地」に「黒焼物」が出荷されていたという。同時代史料ではないので、その評価は慎重を期す必要があるが、上述した明治前期における土瓶の出荷は、近世以来の

薬種	白58斤余, 山90斤余, 木32斤余, 丁180斤余, 角 3 本, 水角16本 <3852貫861文> (89.4%)
反物	紋紗 2 本, けんちう 4 反, 飛色羅紗 1 本, 更紗 2 (疋) <217貫508文> (5.0%)
諸色 和服一式仕立	浅黄嶋 1 反, めんわう 2 反, 帯仕立用雪晒 1 丈, 帯仕立, 白羅紗切・黒羅紗切れ 1 つ, □の切 1 つ, 蔦織羽織用一着分, しん木綿, 仕立て代, 香櫃 1 <31貫992文>
茶道具	掛け物 1 幅, 茶入返上取合, 掛物の袱紗 2 枚, 宇掛け物 3 幅, 唐画掛け物 1 幅, 鉄茶釜 1, 茶入 2 つ, 茶杓 2 本, 茶入取合 8 つ, 茶出し 1 つ <56貫757文>
陶磁器	水さし角丸 2 つ, 水さし 1, 茶碗 2 つ, 中皿 9 枚, 蓋 1 つ, 盃 10 枚, 小鉢枚, 茶碗一ぜう鉢 1 枚, 井 1 つ, 小井 9 つ, □鉢 1 つ, 水茶碗 5 つ, 紺絵茶碗 14 束, 白焼茶碗 20 束, 油下皿, 南京鉢 1 つ, 此の台 1 つ, 大押鉢 1 つ, 二つ重盃 1 組, 中皿 5 つ, 盃 5 つ取合, 焼物の差 1 つ, 押鉢 1 枚, 南京焼井 1 つ <67貫362文>
細工物	立入口折口箱, 火かご 4 つ, 作□□ 1 本, 鉢入箱 1 つ, 足御台箱 1 つ, 雁の口櫃 1 つ, 鼈甲櫛 1 枚, 石鉢 5 つ <66貫348文>
食品他	泡盛□24つ, 塩から 1 斗, 右入れ蓋 1, からすみ, □当せんし 6 斤 8 分 7 勺 5 才, 同 5 斤 6 分 8 25, 大官香, 中官香, 筑仙香 <16貫30文>
合計 4308貫858文	

表 1 嘉永 5 年・薩摩組購入品 (深井 1999 より体裁のみ一部改変)

海南布 29 反, 山東紬 3 反, 白羅紗切, 横 3 勺 4 寸 6 分, 黄ビロウド 2 丈 7 勺, 同 4 つ割, 同幅, 海南布 20 反, 黒ビロウド 6 丈 3 勺 5 寸, 黒口羅紗 1 本, 鶴せん 1 枚, 同 1 枚, 納戸羅紗 1 本, 白紬広坂長物 1 疋, 鼠色緞子 1 本, 毛氈 20 枚, 山東紬 1 反, 海南布 1 反, こんとん 7 丈 5 寸, 宮沙形部 1 疋, 花織め*布 1 引き, 赤ばしかふ 29 反, 上物ばしょふ島 5 反, 白袋入紺羅紗 1 本, □□織 1 本, 中□□□□ 2 反 <881貫198文> (26.5%)	
押鉢 1 枚, 黒夏目 1, 柿□同 1, 薄茶碗 7 つ, 押鉢 1 枚, 中皿 10, 南京ふか出し 1 つ, 乾山菓子鉢 1 つ, 薄茶碗 1 つ, 小皿 9 つ, 茶碗井□20, 八口形改物椀 1 束, 小丸盆 50, 菓子椀 50, 三つ入子重 1 組, 二人弁当 2, 朱丸形吸物椀 30, 大菓子盆 40, 1 人弁当 2, 折*箱 15, 押鉢箱 1, 菓子盆箱 8, 吸物椀箱 8, 白砂糖入箱 1, 白氷箱 1 <59貫940文> (1.8%)	
太白砂堂(糖) 65 斤, 柳こり, 太白砂糖, 正味 60 斤, 梅の落煉 2 斤, 同油 1 斤, 右入れ蓋 2 つ <65貫963文> (2.0%)	
白 50 斤, ふたのい 30 斤半, 赤 62 斤, 山 18 斤 9 合 375, 大 34 斤半, 角 7 本 <2314貫485文> (69.7%)	
合計 3321貫586文	

表 2 嘉永 6 年・薩摩組購入品 (深井 1999 より体裁のみ一部改変)

年	西暦	出典	出荷港	項目	出荷量(個)	出荷額(円)	出荷先	生産地
明治 14年	1881	年報3	薩摩国日置郡 神ノ川村浦	土瓶	25300	455.7	肥前	
明治 14年	1881	年報3	薩摩国日置郡 帆ノ港浦	土瓶	7000	137.5	肥前島原	
明治 21年	1888	年報8	日置郡神之川村 河岸場	土瓶	9000	142	肥後	苗代川
明治 22年	1889	年報9	日置郡神之川村 河岸場	土瓶	16500	256	肥後	苗代川
明治 23年	1890	年報9	日置郡東市来村 神之川河岸場	土瓶	9500	152	肥後	日置郡 下伊集院村
明治 24年	1891	年報10	日置郡東市来村 神之川河岸場	土瓶	9500	143.25	肥後	日置郡 下伊集院村
明治 25年	1892	年報11	日置郡東市来村 神之川河岸場	土瓶	13000	216	熊本	日置郡 下伊集院村

表3 明治前期における苗代川土瓶の県外出荷事例

流通を継承するものと想像される。

以上より、遅くとも18世紀末には生産が始まっていた薩摩土瓶は、その後、19世紀にかけて藩内において流通するとともに、藩外(県外)にも出荷され、全国的に流通していた可能性が十分に考えられる。冒頭で述べたように、その具体的な流通範囲や流通量については、考古学資料から検証していくことが今後の課題なのである<sup>(6)</sup>。

最後に、いくつか興味深い記述が見られる、②の『薩州産物録』について検討しておきたい。

まず記述の元となった情報が、佐藤成裕の薩摩滞在時期(1781-83)のものか、本書執筆年(1792)までに得られた情報なのかは確定しがたいが、1780年代頃の状況を記していると考えられる。

文中に見られる「肥前焼」が磁器のみに限定されるかどうかは確言できないが、年代的に磁器を含んでいることは十分に考えられる。それゆえ「今種々出ス肥前焼ト同様也」は、薩摩産の陶器と磁器両者を含んでいる可能性がある。次に「三都」は、江戸・大坂・京都のことだが、④の「薩州土瓶は奥羽の地方に至る」から、ここでは三都=全国といった意味合いかもしれない。

「琉球及島々」は、1780年代に、薩摩焼が沖縄と南西諸島で流通していたことを示唆する。ただし佐藤は琉球や南西諸島に渡っていないということから(上野1982 p.165)、伝聞の可能性が高い。しかし文化10年(1813)の大噴火で、全住民が離島した諏訪之瀬島(1883年帰島)の切石遺跡から、18世紀後半以後と考えられる加治木・始良系陶器が出土していることは、考古学的傍証となる(大橋・山田1995, 渡辺2004)。一方、沖縄では、19世紀代の薩摩磁器の出土が確認

できるが(大橋2003, 橋口2001, 渡辺2004)、1780年代における様相については、考古学的にはまだ検討を要する。

そして「支那へ入ル」は注目すべき記述である。中国清朝・道光元年～光緒元年(1821-75)の福州-琉球間の貿易について検討した周益湘(1934(1971))<sup>(7)</sup>によれば、琉球に「磁器」が福州から輸入されるとともに<sup>(8)</sup>、琉球から福州へ輸出された物品に「磁器」(道光20年(1840), 73斤)がある。わずか1例なので、安定した輸出があったとは考えにくい。沖縄では磁器が生産されていなかったため、本土産磁器の可能性もある。薩摩磁器とは確定できず、また若干の年代的なギャップがあるが、「支那へ入ル」との関連も考えられる。今後の大きな検討課題のひとつと言えよう。

最後の「硯ノ類猶多シ」であるが、薩摩焼の硯についてははっきりしない。ただ「硯ノ類」を文房具と解すれば、龍門司窯の川原芳工(1727-98)作と伝えられる玉流し釉硯屏(鹿児島県歴史資料センター黎明館1998 p.111)や、年代はやや下るが、加治木町日本山窯跡(1860年～明治初期, 関編2005)で多数出土している水滴など該当するのであろうか。

### おわりに

以上、薩摩焼の藩外流通に関する文献史料をまとめ、それらについて若干の検討を行った。現段階では、なんら明確なことは言えないが、これまでほとんど議論されることのなかったテーマについての問題提起として、ご寛恕いただきたい。

2006年6月10日

## 謝辞

成稿にあたっては、丹羽謙治氏(鹿児島大学法文学部に)に貴重なご教示を得ました。感謝申し上げます。

## 注

(1) なお東京都港区の薩摩藩江戸上屋敷跡から、まとまった数量の薩摩焼が出土しているが(毎田 2006)、正式報告が未刊行であり、またその遺跡の性格上、その出土品は、本稿で主として検討対象とする商品としての薩摩焼流通とはやや性格が異なると考えられる。

(2) たとえば橘南谿の『西遊記』について、高木善助は、「総て南溪子の西遊記は、文章奇に過て実を失ふ事多し」と批判している(宮本他編 1969 p.630)。

(3) 方言辞書である越谷吾山『物類称呼』(安永4年(1775))に、「土瓶○薩摩にて ちよかと云 同国ちよか村にてこれをやく ちよかはもと琉球国の地名なり

其所の人薩州に來りてはしめて制るゆへにちよかと名づく(下略)」とある(越谷(東條)1941 p.119)。「同国ちよか村にてこれをやく」の記述に基づけば、遅くとも1775年段階には、薩摩で土瓶の生産が始まっていたと言えるかもしれない。しかし越谷吾山は、鹿児島には来ていないようなので、おそらく伝聞に基づくものと思われ、また「ちよか」の名称や由来についても疑問が残るため、どの程度信頼が置けるか判断に迷う。

(4) 表1・2に挙げられた物品に、薩摩焼が含まれるかどうかは判然としない。ただし表1の「白焼茶碗20束」は白薩摩あるいは白磁の可能性はある。

(5) 『鹿児島県勸業年報』については渡辺 2001 参照。また明治14年出荷の土瓶については、生産地が記されていないが、出荷港が明治21～25年分と同じあるいは近く、近傍では他に土瓶生産地が知られていないことから、苗代川産と考える。

(6) 加賀の豪商・銭屋五兵衛(1773-1852)の日記『年々留』に「薩摩焼玉藻茶入」と出てくる(天保3年(1832)

若林編 1984 p.100)。注記によれば、瀬戸の玉柏手茶入「玉藻」の薩摩焼写であろうという(同 p.286)。「茶道具」としての薩摩焼茶入の流通を考える上で興味深い記述であるが、同時代製品の流通を扱う本稿の主旨からやや逸脱する可能性があるため、ここでは紹介のみにとどめる。なお『年々留』記載の「道具」については、谷端 1988(pp.307-333)を参照した。

(7) 周論文の原典である『中国近代経済史研究集刊』1-1(1932)は確認できず、本稿では周康燮編 1971に再録されたものに拠った。また本論文に関しては、鹿児島県編 1940(pp.762-780)および大石・原田・張 1985を参照した。

(8) おそらくこれらの一部が、橋口亘(1999)が想定したように薩摩に入ったのではないかと想像される。また今回は詳しく触れなかったが、②には「焼物 琉球ノ素焼ノ酒器皿鉢散蓮花ノ類色々南京モアリ」という記述もあり、「南京」=南京焼=中国産磁器が薩摩に流入していたことを示唆している。これもまた琉球経由であろうか。「琉球ノ素焼ノ酒器」とは、18世紀後半～19世紀に鹿児島県本土地域からの出土が増加する沖繩壺屋窯産の荒焼(無釉焼締陶器)と考えられる(渡辺 2004・2006)。

## 参考引用文献

- 上野益三 1982 『薩摩博物史』 島津出版会  
大石圭一・原田武夫・張淼湧 1985  
「周益湘著「道光以後中琉貿易的統計」の研究」『南島史学』25・26号 pp.64-97  
大橋康二 2003 「沖繩出土の日本陶磁」  
『東洋陶磁』32 pp.47-56  
大橋康二・山田康弘 1995  
「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』15 pp.141-164  
鹿児島県編 1940 『鹿児島県史』2巻 鹿児島県鹿児島県史料刊行会 1960  
『薩藩政要録』鹿児島県史料集(1) 鹿児島県鹿児島県立図書館編 2003  
『薩藩名勝志(その一)』鹿児島県史料集(42) 同館 鹿児島県歴史資料センター黎明館 1998  
『世界のさつま』展図録 同館  
越谷吾山(東條操校訂)1941  
『物類称呼』岩波文庫 岩波書店  
佐藤信淵 1883 『薩藩経緯記』有隣堂  
周益湘 1932(1971)  
「道光以後中琉貿易的統計」周康燮編 1971 『中国近代社会経済史論集』上冊 pp.348-358 崇文書店(香港)  
関明恵 2006  
「薩摩土瓶について～堅野(冷水)窯跡編～」『からから』No.21 pp.15-18  
関一之編 2005 『日本山窯跡』加治木町教育委員会

- 高瀬保 1995  
「富山売薬薩摩組の鹿児島藩内での営業活動-入国差留と昆布廻送-」『九州水上交通史』日本水上交通史論集第五巻 pp.225-261 文献出版
- 谷端昭夫 1988 『近世茶道史』淡交社
- 徳永和喜 2005  
『薩摩藩対外交渉史の研究』九州大学出版会  
日本随筆大成編集部編 1929  
『日本随筆大成』第3期2巻 日本随筆大成刊行会
- 橋口亘 1999 「薩摩出土の清朝磁器」  
『貿易陶磁研究』No.19 pp.141-146
- 橋口亘 2001 「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼」  
『からから』No.10 pp.9-16
- 深井甚三 1999  
「近世後期、加越能の抜け荷取引湊の廻船問屋展開と富山売薬商の抜け荷売買」『富山大学教育学部紀要』No.53 pp.23-36
- 毎田佳奈子 2006  
「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”(1)-土瓶・銚子・水注-」  
『東京考古』24号 pp.129-155
- 宮田洋一・関明恵・三垣恵一編 2003  
『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮本常一他編 1969 『日本庶民生活史料集成』第2巻 三一書房
- 橋南谿(宗政五十緒校注)1974 『東西遊記』全2巻 東洋文庫 248・249 平凡社
- 若林喜三郎編 1984  
『年々留-銭屋五兵衛日記』法政大学出版局
- 渡辺芳郎 2001  
「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産(1)-『鹿児島県勸業年報』『鹿児島県統計書』から-」『鹿児島大学法文学部 人文学科論集』第53号 pp.61-92
- 渡辺芳郎 2004  
「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20年の成果と今後の課題」』pp.63-78
- 渡辺芳郎 2006  
「鹿児島県本土地域出土の近世沖縄産陶器」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』桂書房 pp.141-152
- 
-